

# ドキュメンタリー『密航』（1980）と 日韓現代史表象の「転換期」

A Turning Point in the Representation of Contemporary History between Japan and Korea focusing on the Television Documentary *Mikko* (1980)

丁 智恵\*  
Jihye Chung

## 1. はじめに

戦後日本のテレビをはじめとするマス・メディアの記憶のなかで、朝鮮半島からの〈密航〉はどのように描かれてきたのだろうか。50年代から60年代にかけて、〈密航〉や大村収容所のイメージは意外にも多くのメディアに登場し、その存在は（実態とは多少かけ離れたものであるにせよ）日本人の記憶に刻まれていた。

大村入国者収容所とは、1950年10月1日、出入国管理庁の附属機関として発足し、当初は米国占領軍によって設置され、その後日本政府の管理に委ねられた不法入国者の収容施設である。長崎県東彼杵郡江上村に設置され、名称は「針尾入国者収容所」であったが、時期を前後して同構内に警察予備隊が駐屯することになったため、同年12月末日に長崎県大村市森園郷字埋塚の元第21海軍航空廠跡へ移転した。この収容所の特徴は、欧米人や中国人ではなく特に朝鮮人の「被退去強制者」を収容するために設置されたという点である。「不法」入国者や犯罪

を犯して刑期を満了した「刑余者」や原爆症治療のために密航した被爆者、ベトナム派兵を忌避し脱走し密航した兵士もここに送られ強制送還の対象となった。この場所は北東アジアにおける占領政策の遺産であり、一種のヘテロトピアである。それは、亡命者、故郷放棄者や故国離脱者、放浪者などの移動の経験を、強制送還の下に溶解する場所であった（玄 2013; 340-341）。

民主主義理念の「盲点」を暴露する戦後日本の国籍・出入国管理政策と大村収容所の存在は、戦後日本で生まれた国家権力の広大なワイルドゾーン（モーリス・スズキ ;2005,124-125）といえる<sup>1</sup>。「新生日本」の出発に際し英雄物語から排除された被植民者たちが押し込められた場所として存在したのがまさに大村収容所である。戦争は「英雄物語」として語りうるし、いったん悪者と被害者が区別されれば日本人は過去と訣別でき、歴史の断絶、切り離された過去、

\* 東京大学大学院情報学環特任研究員

キーワード：テレビドキュメンタリー、映像メディア、韓国、記憶、密航

新たなはじまりというフィクションが用意された上で、全てを変えた戦争の「戦後」が始まった（グラック 2007;34-35）。この空間から日本社会を眺めることにより、戦後の「新生日本」の歩みが、平和主義や民主主義、基本的人権を掲げつつも、いかなる矛盾を孕んでいたのかが見えてくるだろう。

このような空間や人々は、戦後日本人にどう記憶されてきたのだろうか。それを探るために、20世紀の大衆の記憶に大きく影響を与えたテレビというメディアの中の記憶を紐解くものとする。テレビは戦後日本の中で国民的記憶に重要な影響を及ぼしてきたという点は否めないが、これまでテレビ・アーカイブの利用が難しかったため、先行研究が非常に少ない分野でもある。またテレビ以外のメディアでは、小説や戦記などの文字テキストを中心に「体験」、「証言」、「記憶」と戦争経験の議論を推移した成田龍一の研究（成田 2010）や、「反戦文学」「戦争文学」などといわれ書籍としても映画としても国民的ヒット作となった作品を分析した福間良明の研究（福間 2006）などがある。元ディレクターの桜井均はNHKのアーカイブを利用し、テレビが戦争をどう描いてきたか、ドキュメンタリー番組を中心に論じた（桜井 2005）。テレビ・アーカイブの非公開のために困難であったテレビ研究であるが、近年、NHKはじめ民放の放送番組を対象に学術利用が試行されつつある状況である。

また、作品制作の背景や表象の影にあるものについて考察するために、制作関係者へのインタビューを行った。トンプソンは、「オーラル・ヒストリーによる史料の利用は、歴史の文体を

変えるだけでなく、歴史の内容を変える。オーラル・ヒストリーは、法律、統計、行政、そして政府から、人びとへと焦点を移す」（トンプソン2002; 513-514）という。オーラル・ヒストリーを通して、戦後日本のメディア史の中で語られることのなかったもう一つの歴史へと光を当てていくのだ。

さらには、映像作品を用いて歴史を振り返る際には、映像作品の中におさめられているインタビュー映像そのものの史料価値にも着目する。映像には、そのときの表情や声色、髪型や服装、方言や訛り、背景に映し出される住居や職場などの風景に至るまで、文字媒体では伝えることが難しい非常に多くの情報が映り込んでいる。それらの多くは撮影者や編集者によって手が加えられているとはいえ、ビデオカメラが個人によって現在ほど手軽に利用できなかった時代における視聴覚資料は、後述する80年頃の密航者たちの生々しい証言のように、歴史の生き証人たちが次々とこの世を去っていく昨今において、その資料としての価値は計り知れない。

以下の節では、戦後日本社会が眺めてきた〈密航〉や大村収容所のイメージを辿ることにより、日本と朝鮮半島のあいだを往来する人々の移動についての認識や記憶の変化について考察する。とくに70年代頃の密航が「帝国の遺産に基づく移動」から「グローバリゼーション下の移動」（外村 2013;289）へと移行していく時期の変化は、日本のメディアにおける在日朝鮮人や朝鮮半島に対する表象が変化していった「転換期」（次節で詳述）とも重なっていた。この時期までの〈密航〉や大村収容所の記憶の変遷

を整理し、80年に制作されたドキュメンタリー『密航』の具体的なテキストや制作背景の分析を通じて、この時期における〈密航〉の記憶の

変化、そして日本社会と在日朝鮮人をめぐる状況の変化についても考察する。

## 2. 戦後日本の映像メディアにおける〈密航〉の記憶

### 2.1 日韓現代史表象の変遷

戦後日本において韓国・朝鮮との歴史や関係はどう描かれてきたのだろうか。表1は、テレビや映画などの映像アーカイブを活用し、時代別に韓国・朝鮮に関連して主に描かれているテーマと、それ以外の戦争に関する番組の主なテーマについて簡略的に整理したものである。

この表から、いずれも70年代から80年代にかけてテーマが多様化し、より周縁的な声が現れてきたことが分かる。それでは、このような表象の中でとくに密航や大村収容所はどう描かれていたのか。

表1：映像メディアの表象の変遷

年代	韓国・朝鮮に関連して主に描かれているテーマ	その時代の戦争に関連する番組の主なテーマ
50年代	朝鮮戦争、在日の暮らし、北朝鮮への帰還事業	大陸からの引き揚げ、戦犯
60年代	北朝鮮帰還事業、韓国人傷痍軍人・被爆者、金婚老事件	靖国神社、被爆者、傷痍軍人
70年代	韓国人被爆者、強制連行、浮島丸爆沈事件、韓国から引き揚げた日本人の話、在日のアイデンティティ・差別問題	特攻隊、未帰還兵、原爆症、東京裁判、元日本兵の回想、女性たちの引揚経験、満蒙開拓
80年代	韓国からの密入国者、様々な戦後補償問題（被爆者、「慰安婦」、BC級戦犯など）、民族差別、アイデンティティ	原爆、歴史教科書、元日本兵の証言、戦犯、中国残留孤児・婦人、昭和天皇の戦争責任
90年代	戦後補償問題（BC級戦犯、被爆者、サハリン残留、慰安婦問題、浮島丸事件、強制連行など）、在日一世の生き様、在日三世のアイデンティティ	原爆、戦後処理、東京裁判、シベリア未帰還者、七三一部隊、連合軍捕虜、中国残留孤児、日中戦争

### 2.2 理想の「祖国」を望郷する人々の空間として—50年代

1953年、NHKのテレビ放送が始まり、日本のテレビ時代が幕を開けた。50年代には、韓国や朝鮮にまつわるテーマの番組は少ないが、日本で初めて在日朝鮮人のことを取り上げたテレビドキュメンタリーに『日本の素顔 日本の中の朝鮮』（1959.1.18, NHK）があり、この中では当時の在日朝鮮人の暮らしぶりや、子どもの

教育問題、総連と民団の対立、李承晩ライン、そして大村収容所について取り上げられている（図1参照）。この番組が放送された59年は、北朝鮮への帰国事業が始まった年でもあり（図2参照）、大村収容所の中でも北朝鮮を支持する人々が熱心に祖国の思想について勉強している様子が描かれている（図3参照）。



図1. 大村収容所の子ども



図2. 北朝鮮帰国事業の申請



図3. 収容所内の「北朝鮮棟」

さらに同年の『朝日ニュース全国版第707号望郷』（1959.2.11）においては、大村収容所の中で帰国事業決定の知らせを聞き歓喜する人々の姿が映し出されていた。ニュース内では岸信介が国会で答弁する様子が映し出され、「純粹にこれらの在留朝鮮人が帰りたいという熱望がありましたから、純粹の、人道的立場、基本的人権を尊重する立場からこれらの問題を処理したい」（傍点筆者）と、「純粹」「人道的」が強調されていた。続いて大村収容所内でこの政府決定を聞き歓喜する人々が登場し、ナレーションは、「手の舞い足の踏むところを知らないとはこのことだろう」と彼らの笑顔をクリックアップし、この知らせがいかに収容所内の人々

### 2.3 「愛」と「友情」の象徴として—60年代

60年代になると、大島渚監督の『ノンフィクション劇場 忘れられた皇軍』（日本テレビ、1963）では戦時中に徴用され負傷した朝鮮人の問題などが取り上げられ大きな反響を呼んだ。また68年には金嬉老事件が起これ、この問題をめぐる特集が組まれた<sup>2</sup>。この頃は、ベトナム反戦運動（1965-）などが盛り上がり、市民や知識人、ジャーナリストたちの戦争や平和に対する市民の意識が高まっていった時代である。

にとって大きな喜びであるかという点を強調した。

しかし、なぜこれほどまでに北朝鮮への帰国事業の知らせがクリックアップされたのだろうか。モーリス・スズキは、この時期の日本のメディアは、北朝鮮への帰国事業について非常に重要で大きな役割を果たし、この計画への熱烈な支持を表明し、60年代半ば頃まで強い関心をもって追いつけたという（モーリス・スズキ 2014:270）。上に述べた映像作品からも読み取れるように、大村収容所の存在は、祖国を望郷する人々たちが帰国を待ち侘びる象徴的な空間として描き出されていた。

「密航」や大村収容所の問題は、教育映画やテレビドラマの中でヒューマンイズム溢れる作品として登場していた。

たとえば、『日本の子どもたち』（1960、青山通春）という児童教育映画がある。この作品の後援には長崎県のPTAや小学校・中学校校長会、教職員組合、教育委員会などが名を連ねており、小学6年生の児童が書いたつづり方を原作に、長崎の小学生と、大村収容所内に収容さ

れている子どもたちとの交流が描かれている。しかし作品の中では、日本と韓国の間にあった過去の植民地支配の話や、収容所内での過酷な状況については全く表現されることなく、日本人と韓国人の友情が芽生える美談として描かれていた。

つづいて、『東芝日曜劇場 死ぬほど逢いたい』(1962, RKB 毎日)<sup>3</sup>という作品がある。離れ離れになった日本人の夫を探しに密航してきた韓国人女性が収容所に入れられ、所長はなんとか彼女が夫に会えるように奔走するが、努力もむなしく強制送還されるというストーリーだ。植民地の負の歴史が男女のロマンスにすり替えられていたが、強制送還の様子などは実際の映像が使われており、リアリティのあるつくりとなっている。ほかにも、戦後済州島から大阪に密航してきた男性が入管に出頭するエピソードを美談として描いた『金在元の告白』(1963, 朝日放送) などがある。

#### 2. 4 変化する社会と政治状況の中で—70年代・80年代

70年代に入ると、ますます批判的なドキュメンタリーや社会派ドラマは敬遠されるようになっていくが、日中国交正常化や南北共同声明発表、沖縄返還(ともに1972年)、ベトナム戦争終結(1973)などのアジアにおける様々な変化は、かつての戦争に対する記憶を振り返る機会にもなった。韓国人の被爆者や、戦時動員の問題などが注目を浴び、韓国人被爆者が原爆症の治療を受けるために日本に密入国し訴えを起こした問題などがクローズアップされていた<sup>6</sup>。70年代頃、「グローバリゼーション下の胎動」として韓国から韓国人の労働者が流入し始めて

この時代の作品の特徴は、帝国や植民地支配の歴史が忘却され、「普遍的」なヒューマニズムやロマンスに置き換えられていたことである。日韓条約締結(1965)を控え、北朝鮮帰国事業(1959-)が積極的に進められ、朝鮮半島との関係を悪化に導くような政治的な内容はいわばタブーであり<sup>4</sup>、友情や愛情を描き友好のシンボルとなる作品が望まれた。なおこの頃金東希などのベトナム派兵韓国人密航事件(1965)などがあったが、ベトナム戦争報道のあり方については当時政界やメディアにおいて大きな論争となっており、批判的に取り上げることが難しい状況であった<sup>5</sup>。また言うまでもなく上記のようなイメージは、植民地主義の負の遺産として成立し、内部で厳しい弾圧や内外で激しい抵抗運動などが行われていた実情とは、大きくかけ離れたものであり、当時の日本の一般大衆に対して実態を覆い隠す機能を果たした。

いたが、密入国や不法滞在、不法就労の問題などの深刻で政治的な問題はテレビではタブー視されていた。60年代から70年代にかけて、ドキュメンタリーやドラマが企画や台本を変えられたり、放送が打ち切りにされたりする出来事が相次いだ。放送中止の背景には、日米安保条約改定やベトナム戦争を巡る激動の時期に、テレビがジャーナリズムとしての機能を強めていくことへの牽制・圧力があった。在日韓国人に関する深刻なテーマもその対象であり、密入国や不法滞在の問題もテレビでは扱いにくいテーマであった。80年代になると、教科書問題(82



年)や中曽根首相の靖国公式参拝(85年)などが起こり、歴史問題をめぐって日本と韓国や中国などとの間に激しい論争が起こった。在日韓国・朝鮮人をめぐっては、特例永住制度の実施(82年)、国民年金法の国籍条項撤廃(82年)、国民健康保険法の国籍条項撤廃(86年)などの大きな変化を迎え、定住化し地域社会に暮らす在日韓国・朝鮮人の差別やアイデンティティ、そして、密入国の問題などに照明を当てた番組が数多く作られた。

以上のように、70年代から80年代にかけて、韓国・朝鮮に関連する映像作品は非常に多様化し、重層的な語りが登場しはじめた。それはその時代の戦争に関連する他のテーマについても

同様で、女性や中国残留孤児の問題など、周縁化されていた問題に関しても照明が当てられより多様な語りが登場するようになってきた。戦後補償問題などの作品は、冷戦終結と元日本軍慰安婦のカミングアウトなどがあった90年代が最盛期であるともいえるが、実際には、これらの問題に対する関心や問題意識を共有するジャーナリストや知識人たちのネットワークは70年代頃から萌芽をみせていたのである。

以下では、この作品が制作された時代における変化を考察した上で表象の「転換期」(丁2011)とし、具体的な作品としてドキュメンタリー『密航』(1980)の分析を通じてそれまでの時代からの変化について考察する。

### 3. 「転換期」における変化—ドキュメンタリー『密航』(1980, NHK)から

#### 3.1 制作の背景

『NHK特集 密航』(1980.5.16, NHK)(以下、『密航』とする)(図4 参照)がつくられた80年前後は、上述したように、韓国・朝鮮をめぐる植民地支配や戦争被害の記憶について非常に作品数が増加しテーマも多様化していく「転換期」であり、それまでとは異なる視点や方法から日本と朝鮮半島とのあいだの過去と現在について語られ始めた時代であった。

『密航』のディレクター萩野靖乃は、1937年東京生まれ、戦争中は栃木に疎開、東京では空襲も経験し、8歳で終戦を迎えた。彼は東京大学文学部国史学科に進学、60年の安保闘争を経験。同級生の樺美智子が警官隊との乱闘の中で死亡した。萩野は、飯田橋の警察病院の地下室に置かれていた樺の遺体にもう一人の学友と付

き添っていた(萩野 2013; 30-31)。学生闘争に参加した当時の若者たちと同様、萩野も大学を5年かけて卒業し、安保闘争の1年後の61年4月にNHKにディレクターとして

入局した。彼は当初は教育局テレビ学校放送部で「子どもドラマ」を制作、学校や若者をテーマとする番組制作に取り組み、73年に大阪放送局教育部に異動。大阪でも多彩なアングルから社会の底流を描き、『ドキュメンタリー 救急指定私立S病院』(1975)では芸術祭優秀賞を



図3. 『密航』(1980)

受賞した。

しかし、萩野自身は在日朝鮮人や密航の問題にもともと関心を持っていたわけではない。彼がその存在に注目し始めたきっかけが、その頃取材のネタを探すために大阪の街中で「国籍売ります」という不思議な看板をみかけたことであつた<sup>7</sup>。

萩野は大村収容所への取材を試みたが、当初法務省は取材を拒否した。3年もの歳月をかけ、東京の法務省入国管理局、大村入国者収容所、大阪の入国管理事務所の3カ所に一人で足しげ

### 3. 2 映し出される密航者たちの素顔

この番組の中では、素顔と本名をさらけ出した入所者たちが多数登場する（図5 参照）。彼らの密入国や大村収容所収容に至る過程は多様であったが、世代によって密航の背景や家族や親戚の状況が少しずつ異なるのが分かる（表2 参照）。

1970年代半ば、入管当局は摘発されていない密入国者と在留超過の不法残留者は5～10万程度にもものぼると推定し、その多くは韓国からであった。そのなかには離散状態にある家族の再結合のために日本にやってきた人々も含まれるが、1970年代にはすでに韓国からの密航は日本での就労を目的とするものが多くなっていた。就労目的の韓国人密航者の大多数は親族を頼っており、ハップサンダル、プラスチック、メリヤス工場など「同胞経営の零細工場」での作業に従事していた（外村 2013:280）。

また表3は、法務省入国管理局が出した国籍別・事由別退去強制令書発付数についてであるが、1965年に1444件だったのが、70年頃には

く通り、当時マスコミを嚴重警戒していた難関を少しずつ乗り越えていった。1979年10月29日、韓国の朴正熙大統領が暗殺され、国葬が行なわれた日に、偶然カメラは収容所の中に入っていた。そのニュースをきっかけに萩野と入所者たちは会話を交わすようになる。交渉の結果、素顔を出して取材に応じる人、音声だけのインタビューに応じる人、完全に取材拒否の人と分かれた。番組取材当時の収容者は154名だった。

一旦下がり  
落ち着きを  
見せたかとおもうと、その後徐々に増加傾向をみせているのがわかる。



図5. 素顔で登場する密航者

この番組の中でインタビューに答えている入所者の密航した時期は1964年～76年頃である。この作品の中では、植民地期に日本で生まれ親戚などを頼って密航してきた古い世代と、過去にこだわりをあまり持たず経済的理由を動機とする若い世代を描き分けている。

70年代に密航した韓国生まれの2,30代の人々が目立ち、多くが日本で厳しい労働に従事していた。若い世代の多くは日本に親戚がいなかったが、日本で結婚し子どもができ、家族離散の憂き目に遭っている者も数人いた。

表2：入所者たちの状況

氏名 (性別)	当時の 年齢	密航時の状況	主なインタビュー内容
金 (男)	50歳	日本生まれ。 戦後帰国し71年に 密航で渡日。	日本で生まれ育ち日本の教育しか受けていない。日本には身内が全部いる。韓国には兄弟が一人もいない。日本に兄弟がいるから、こっちでお金を稼いで、帰ってから商売でもやろうと思った。日本ではプラスチック収集、鋳物工場、それから埼玉の市役所の清掃には5年ちょっと従事していた。
慎 (男)	59歳	日本生まれ。戦後帰国。 64年に密航で渡日。	精神的に苦しく経済的にも恵まれなかった。給料12.3万円程度だが部屋代や食事代を引くとわずか2.3万円しか手元に残らなかった。 人夫の仕事、ガラス工場など。体を壊したが法を侵した者には社会的補償は全然ない。
金 (男)	37歳	1972年密航。	ずっと働き続けて楽しかった思い出があまりない
文 (男)	40歳	1972年密航。	日本に親戚はいないが、日本に親戚がたくさんいる友人に誘われて、長さ15メートル位の日本の船に若い人ばかり7人で乗って渡日。晩10時頃に乗船、翌朝9時に「小さい島」に到着。そこで一晩泊まって、伝馬船に乗って降り、電車に乗って神戸に到着。
高 (男)	25歳	1974年密航。	上陸地は大阪の南港あたり。降りてすぐに南海電車に乗って難波まで降りた。
張 (男)	29歳	1969年／1976年再び 密航	上陸地は大阪。4人で来た。途中で出身の村の人が何人か死んでのを見た。69年に密航し、日本に妻子がいる。76年の再密航時に捕まる。
玄 (女)	—	1966年密航	子どもと入所してから2年近い。日本人の夫との間に子どもがいる。 (80年4月現在、母子は仮放免中)
夫 (男)	32歳	—	妻と子どもがまだ大阪にいる。
韓 (男)	29歳	1972年密航	苦勞した。日本のことは思い出したくない。子どももいるし、(韓国には)家もないから苦しい生活をすると思う。

表3：国籍別・事由別退去強制令書発付数

	総数	国籍別			退去強制事由別					
		韓国・朝鮮	中国	その他	不法入国	不法上陸	資格外活動	不法残留	刑罰法令	その他
昭和35 (1960)	1,895	1,690	108	97	1,301	129	-	427	37	1
40 (1965)	1,873	1,444	232	197	1,006	215	-	629	23	-
45 (1970)	893	522	82	289	328	73	12	436	35	9
46 (1971)	901	593	67	241	400	53	25	388	30	5
47 (1972)	857	615	46	196	455	44	51	249	57	1
48 (1973)	984	737	45	202	613	43	48	265	14	1
49 (1974)	1,267	893	161	213	693	63	173	328	9	1

典拠：法務省入国管理局『出入国管理 — その現況と課題 — 昭和50年度版』1976年、134頁。

植民地期に日本で生まれた入所者たちは、過去の植民地支配と自分の密航の経緯を関連づけて話す。日本で生まれ育った慎は、終戦時24歳で「祖国」へ帰国し、また生まれ育った空間に戻ってきた。

我々が36年間支配を受けた時にですね、自分の意志で日本に来た人が何人いるんだということですね。(中略) 我々の親の世代、我々

のおじいさんの代、そのお父さんや爺さんたちが、自分の意志でここへ来たのかということですね。そういう人たちが自由意志に、私は日本行きたい言うてやね、来た人が何人いるかということですね(番組中より)

慎のように植民地時代に日本に暮らしていて、戦後また日本に戻ってくるというケースは少なくない。活字や音声のみによって伝えられ



る情報とは異なり、「密航者」の素顔と流暢な日本語、そして取材者を信頼し切実に訴える様子、息づかいまでを、カメラは痛々しいほど直視している。

また、取材班は入管事務所における残酷なやり取りについても克明に記録している。入管にきた女性に対し、職員はこう伝える。

だからそれだったら韓国に帰ったらいいじゃない、自分の国なんだから。ここは日本なんだ、日本。わかるやろ。あんたにとってみたらな、ここはあんたにとって外国なんや。アメリカとかヨーロッパと一緒になんや。な、それが法律っていうもんや（傍点筆者）

入管職員はかつて植民地と旧宗主国であった朝鮮と日本の関係を忘却し、アメリカやヨーロッパとの関係と完全に相対化している。冒頭で述べたグラックのいう「生まれ変わった日本」にとっては、旧植民地である韓国は今や「外国」であり、「アメリカ」や「ヨーロッパ」と同様の存在なのである。

### 3.3 両側からの逆風

70年代は社会批判的なドキュメンタリーやテレビドラマが敬遠され、在日朝鮮人の深刻なテーマは避けられていた。萩野はこの頃の放送局内の雰囲気についてこう語った。

在日朝鮮人関連のテーマは、扱いが難しかった。やっぱり差別にかかわるものというのは、生半可な気持ちでやると必ず怪我をするってところがある。それは、天皇制や、宗教、

この作品は「帝国の遺産に基づく移動」から「グローバルゼーション下の移動」へとシフトしていく時期の韓国人の密入国問題について、その現場を生々しく克明に記録していた。その後増加する東南アジアなどからの出稼ぎ労働者の増加とそれをめぐる様々な問題について検討する上でも、多くのことを示唆してくれる。

なお強制送還され韓国に戻った彼らが、その後どんな道を歩むことになったのか、番組中では言及されていない。法を犯して〈密航〉し本国に戻った彼らは韓国帰国後厳しく処罰された。番組中でインタビューに答える彼らが、日本での苦労については語るが、韓国政府に対する不満については述べていない。本名と素顔を出してこれから帰国する彼らは、帰国後の処遇に不安を抱いていたはずである。

帰国後の彼らを取材で追いかけられなかったのは、このころはまだ韓国の現地での取材のハードルがまだ高かったためである。同年に光州民衆抗争（5.18）が起こったが、当時韓国当局はまだ海外からの取材に対して警戒していた。

被差別部落、身体障害者とかもそう。結局、組織の中では上の人から何からみんな被害をこうむるわけですよ。しかし、ドキュメンタリーをやってるヤツは、（問題を回避することを）批判して生きているから、やらなくちゃいけないんだけど・・・（萩野 2010）

この番組の企画は、当初、デスクの承諾を得ることができなかったが、ディレクター本人が

リポーターとして登場し、問題が起こった際には自身が責任をとるという条件で、企画を通すことができた。

このような事情により、当時のNHK特集としては例外的に、作り手がリポーターとして登場し、「私」を主語に語るという経緯に至った。作家の吉岡忍は、「テレビの草創期あたりから1970年代半ばあたりまで、制作者はけっこう『私は見た』『私はこう思った』とナレーションなどと言っている。主体が消えたのは、むしろ80年代以降である。知の過程には停滞や飛躍するプロセスが必ずあって、そういうスピード感やリズム感は一入ひとりちがう。そこに正直であればあるほど、番組の作り方も中身も結論もちがってくる」と述べた（吉岡 2006:74）。

萩野は放送後、視聴者の在日朝鮮人男性からの番組に対する批判的な電話を受ける。

在日でもないお前がね、俺たちの世界に土足で上がってきて、ぐじゃぐじゃやるのは一体どういうつもりなんだ

彼はこの苦情の電話を受け落ち込み、『密航』の芸術祭出品を取りやめた。彼にとってこの経験はトラウマとなり、その後在日朝鮮人に関するテーマに再び取り組むことはなかった。時代の変化を鋭く見つめた作品の制作は、体制側・当事者という両側からの逆風がたえず吹きつけるという苦難の連続であった。

一方、予期せぬところで放送後に変化があった。放送後、入管がマスコミの取材を受け入れる数が増えたという。この時代を境に、官公庁や警察などが、マスコミを毛嫌いし取材を拒絶

するというスタンスから、情報収集やPRなどを含めてマスコミをうまく抱き込み利用し

ていく方向にシフトしていったという。この状況は、強制送還の時にまでカメラが密着して取材している様子からも窺うことができる（図6参照）。

入管は、逆に結局マスコミをうまく使えば、自分たちに有利にもなるんだっていうふうにはわかったんじゃない。（中略）ある程度マスコミを、悪く言えば抱き込んで、利用してという気持ちになったような気がするね（萩野 2010）

時代に挑戦するような新たな試みをしたこの作品は、単純なヒューマニズムや美談に回収されることなく、社会の暗部に生きる人々が抱える苦しみや矛盾を直視している。

最後の場面で萩野はこう締めくくる。

1979年、日本は国際人権規約を批准した。いま日本はベトナムやカンボジアの難民をいかに受け入れるかで様々の苦心を払っている。しかし私たちの足元を見つめ直すとき、我々の歴史の帰結がもたらした、もうひとつの存在が浮かび上がってくることを私は感じた（傍点筆者）



図6. 強制送還の様子  
カメラは送還のバスにも同乗した

この社会の矛盾や解決されない問題を目の前に、見る者は居心地悪さすらも感じる。そしてその居心地悪さこそが、普段見て見ぬ振りをしている多くの〈他者〉たちに対する罪悪感を呼び起こす。この番組の衝撃はほかのテレビ制作者たちにも強烈であったようだ。後に彼の後輩となる七沢潔は、NHK入局後にこの作品を見て、「在日」の問題はその頃も稀にしか番組化されないデリケートなテーマであったにもかかわらず、カメラに向かいディレクター本人が「顔出し」で「私」を主語にした萩野の「発話」は衝撃的だったという（七沢 2014:66）。この作品は、大村収容所や密航者、さらにはその後増加していく難民や移民を取り巻く日本社会の問題の現実を鋭く眼差し、前節で述べたような「美談」や「愛」に還元されることなく、かつての大島渚の『忘れられた皇軍』のように、鋭い刃物でえぐるような衝撃を日本社会に与え

#### 4. おわりに

以上、戦後日本社会における〈密航〉や大村収容所のイメージの変遷を整理し、80年に制作されたドキュメンタリー『密航』の具体的なテキストや制作背景の分析を通じて、この時期における〈密航〉のイメージの変化、そして日本社会と在日朝鮮人をめぐる状況の変化、さらには日本のメディアにおける韓国・朝鮮に関する表象に変化が見られた「転換期」との関連について述べた。50年代には北朝鮮への「帰国事業」などの影響から、理想の「祖国」を望郷する人々のための空間として描かれていた大村収容所

た。

しかし、植民地主義の問題を背負い、素顔をさらけ出し「自分の言葉」で訴えかけた萩野は、在日朝鮮人からのクレームによって深く傷つき、この問題から遠ざかってしまった。彼の遺稿集には、「その頃は誰もが二の足を踏む世界にとびこんだという気持ちと、在日でもない日本人の私が余計なことをしたのではないかという後悔の気持ちも残った」と記されていた。筆者が2010年に氏にインタビューをした際には、長年に渡りトラウマを抱え一旦は閉ざした心を少しずつ開きながら、暗闇に光を当てるように当時の話を聞かせてくれた。映画の作り手とは異なり、これまでテレビ制作者は優れた番組であっても放送された後は作り手として評価される機会が少なかった。この番組も当時の日本社会に衝撃を与えたが、語り継がれたり研究されたりする機会はほとんどなかったのである。

は、60年代になると日韓条約の締結を控え、帝国や植民地支配の歴史が忘却され「愛」と「友情」の象徴として描き出された。70年代に入ると、ベトナム反戦運動などに対する体制側の牽制もあり、ドキュメンタリーや社会派ドラマはますます敬遠されるようになる。この頃「グローバルゼーション下の胎動」として韓国から労働者が流入し始めていたが、不法入国の問題などは政治的な配慮からテレビなどでは取り上げにくいテーマであった。しかし、80年代にかけて沖縄返還（1972）、日中国交正常化（1972）、

教科書問題（1982）、在日韓国・朝鮮人の定住化をめぐる様々な法律改正などがあり、日本とアジア、韓国や朝鮮をめぐるのは重層的な語りが見れ始めた。この「転換期」に作られたドキュメンタリー『密航』は、来るべきグローバル時代に日本が国際社会に進出していく上で、過去の植民地支配などの歴史を忘れてはならないと警鐘を鳴らしていたのである。

さいごに、「表象されない歴史」の存在について提起し本報告を結びたい。以上あげた

〈密航〉にまつわる一連の作品群のなかで、深く関連があるにもかかわらず、表象されることのなかった出来事が、「済州島四・三事件」である。

済州島四・三事件とは、1948年4月3日に済州島で起こった島民の蜂起に伴い、南朝鮮国防警備隊、韓国軍、韓国警察、朝鮮半島本土の右翼青年団などが54年9月21日までの期間に引き起こした一連の島民虐殺事件である。韓国政府側は事件に南朝鮮労働党が関与しているとし、政府軍・警察による粛清を行い、島民のうち約3万人が虐殺された。この事件のために、植民地時代に日本に居住し終戦時に済州島に戻った多くの人々が再び日本に親戚などを頼って避難した。当時の済州島からの「密航者」の多くが、この事件に影響を受けていると考えられる。済州島四・三事件は、冷戦による南北朝鮮の分断、朝鮮半島と日本における在日韓国・朝鮮人たちの激しいイデオロギー争い、さらには北朝鮮の帰国事業における済州島出身者の「（北への）帰国」など、様々な出来事と関連しているにもかかわらず、長いあいだテレビなどで論じられることはなく、「密航」の問題とも関連付けら

れることがなかった。例えば、82年の『NHK特集 済州島 母なる島への帰郷』を制作した瀧澤孝司は、当時済州島へ取材に行った際に、韓国観光公社から通訳兼コーディネーターを派遣され、監視を受けながら取材を行ったという。その取材内容は逐一KCIAに報告され、四・三事件に関連する場所の撮影を行い当局に呼び出されフィルムを没収された<sup>8</sup>。また、90年に『NHKスペシャル コリアタウンの二世たち』のディレクターの三浦規成は、大阪の在日韓国人たちのライフストーリーに関心を抱き、猪飼野のコリアタウンに住みついて取材を重ね番組を制作した。三浦は他にも金石範の『火山島』に関する企画を提案したが、反対され実現には至らなかった<sup>9</sup>。この問題は、2000年以降になって韓国内で真相究明の動きが進むにつれ、日本のメディアでも少しずつ取り上げられるようになった<sup>10</sup>。

冷戦崩壊や韓国の民主化や市民意識やジェンダー問題への関心の高まりなどにより、これまで沈黙されてきた出来事が近年になって注目を浴びている。済州島四・三事件はその一例であるが、ほかにも日本軍慰安婦問題、韓国人のBC級戦犯やシベリア抑留問題など、戦後の冷戦体制など東アジアの複雑な状況が、当事者たちの声を封じ込めてきた。歴史の闇に埋もれてきた声は、映像作品の分析のみならず、制作者へのインタビューや歴史背景の理解によって初めて明らかになる。

近年において問題の真相究明が進み、視聴覚資料などの記録のアーカイブ化がなされつつあるなかで、制作関係者たちのオーラル・ヒストリーを聞き取りながら、いまいちど、過去の記

憶を紐解き、再び照らし合わせてみるものが重要である。そのような試みにより、沈黙を強いられナショナル・ヒストリーに流用

(appropriate) されてきた〈他者〉たちのライフストーリー、そしてもうひとつの東アジアの歴史の記憶が浮かび上がってくるに違いない。

## 謝辞

本研究はNHK放送文化研究所と東京大学大学院情報学環丹羽美之研究室による共同研究の成果であり、とくに共同研究者の七沢潔氏と東野真氏には多大な協力を得ました。ここに記して感謝申し上げます。なお、本研究にご協力頂いた萩野靖乃氏は惜しくも2013年4月20日にご逝去されました。改めて故人に感謝の意を表するとともに心よりご冥福をお祈り申し上げます。

## 註

- 1 ワイルドゾーンとは元来はバック・モスが「権力のワイルドゾーン」と名付けた人間の営みの領域である。モスは「近代的主権にはひとつの盲点がある。それは権力が法に優越し、それゆえ、少なくとも潜在的には、恐怖の対象となりうる区域である。この権力のワイルドゾーンは、まさにその馴化不可能な構造のゆえに、大衆民主主義体制に内在的なものである」(Buck-Morss 2000: 23)としたが、モーリス・スズキはこの概念を国民国家の辺境において明確に可視化されるものでもあると思えるとし、大村収容所にも当てはまるとした。
- 2 金嬉老事件については、『特捜ズームイン 金嬉老体験の持ち主たち=菊沼到の寸又峡レポート』(TBS:1969)、『ドキュメンタリー 金嬉老裁判特別弁護人』(NHK:1971)などがある。
- 3 ディレクター：久野浩平 脚本：新藤兼人 主演：乙羽信子 第17回芸術祭奨励賞受賞。モンテカルロ国際テレビフェスティバル最優秀主演女優賞受賞。
- 4 この頃『TBS 水曜劇場 こちら社会部』(1963.10.2-12.25)の「近くて遠い国」という韓国にまつわるエピソードが放送中止になったり、小松川事件を素材に日本社会の朝鮮人差別を批判した白坂依志夫脚本の『他人の血』(1962)が制作不可となり、体制側がテレビの影響力の大きさに気づき始め、直接あるいは間接的な干渉を行なうようになった。
- 5 『ノンフィクション劇場 南ベトナム海兵大隊戦記』(1965)の続編放送中止や、『ハノイ-田英夫の証言』(1968)についての閣議における「偏向報道」であるという論議などは、政界やメディアにおけるベトナム戦争報道のあり方に関する論争につながり、TBS 成田事件(1968)などとともにTBS 闘争の発端とつながっていった。これ以後ベトナム戦争に関する批判的な報道は困難となっていく。
- 6 『マスコミQ ある密入国者・韓国人被爆者、孫貴達』(1968, TBS)など
- 7 萩野靖乃インタビュー、2010年2月実施
- 8 瀧澤孝司インタビュー、2010年7月実施
- 9 三浦規成インタビュー、2010年4月実施
- 10 『ETV特集 悲劇の島チェジュ(済州)』(2008, NHK)や記録映画『海女のリャンさん』(2004, 原村政樹)など。

## 参考文献

- Buck-Morss, S., *Dreamworld and Catastroph: The Passing of Mass Utopias in East and West*, Cambridge Mass: MIT Press, 2000.
- 丁智恵, 2011, 『韓国・朝鮮という〈他者〉イメージ—1970~80年代の「転換期」—』「放送メディア研究」第8巻, 日本放送協会放送文化研究所, 丸善プラネット.
- 福岡良明, 2006, 『「反戦」のメディア史:戦後日本における世論と輿論の拮抗』世界思想社.
- Gluck, C., 2007, 梅崎透訳『歴史で考える』岩波書店.
- 萩野靖乃, 2013, 「テレビもわたしも若かった」刊行委員会編『テレビもわたしも若かった』武蔵野書房.
- 玄武岩, 2013, 『コリアン・ネットワーク:メディア・移動の歴史と空間』北海道大学出版会.
- Morris-Suzuki, T., 2005, 「戦後日本の出入国管理と外国人政策」『戦後日本の社会と市民意識』慶應義塾大学出版会.
- , 2014, 「越境する記憶:映画・植民地主義・冷戦」『「帰郷」の物語/「移動」の語り:戦後日本におけるポストコロニア



- ルの想像力』伊豫谷登志翁, 平田由美編, 平凡社.
- 七沢潔, 2014, 『制作者研究〈テレビの“青春時代”を駆け抜ける〉第4回萩野靖乃:泣いて笑って, 社会の深層を撮る』「放送研究と調査」NHK放送文化研究所.
- 成田龍一, 2010, 『「戦争経験」の戦後史:語られた体験/証言/記憶戦争の経験を問う』岩波書店.
- 桜井均, 2005, 『テレビは戦争をどう描いてきたか:映像と記憶のアーカイブス』岩波書店.
- Thompson, P., 2002, *The Voice of the Past: Oral History* (=2002, 酒井順子訳『記憶から歴史へ:オーラル・ヒストリーの世界』青木書店.)
- 外村大, 2013, 「安定成長期日本の外国人労働者:グローバル化下の移動の胎動」早稲田大学アジア太平洋研究センター編『アジア太平洋討究』No. 20.
- 吉岡忍「テレビの引け目と優越感を越えて」『現代思想』2006年3月.



丁 智恵 (ちょん・ちへ)

- [生年月] 1978年7月6日  
 [出身大学または最終学歴] 東京大学大学院学際情報学府博士課程満期退学  
 [専攻領域] メディア史  
 [主たる著書・論文] (3本まで、タイトル・発行誌名あるいは発行機関名)  
 「韓国・朝鮮という〈他者〉イメージ—1970年~80年代の『転換期』—」日本放送協会放送文化研究所編「放送メディア研究 第8巻」丸善出版、2011年  
 「1950年~60年代のテレビ・ドキュメンタリーが描いた朝鮮のイメージ」『マス・コミュニケーション研究』第82号、2013年  
 「『忘れられた』他者たちの声:テレビ・アーカイブからみる日韓の戦後補償問題」早稲田大学韓国学研究所『韓国学のフロンティア Vol.1』、2015年  
 [所属] 東京大学大学院情報学環 特任研究員  
 [所属学会] 日本マス・コミュニケーション学会、日本社会学科、オーストラリア日本学会など

# A Turning Point in the Representation of Contemporary History between Japan and Korea focusing on the Television Documentary *Mikko* (1980)

Jihye Chung\*

This study examines the portrayal of *zainichi* Koreans (diasporic Koreans in Japan) in non-fiction moving images in Post-war Japan focusing on memory of Korean ‘smuggler’.

In 1980s, globalization and internationalization generated greater interaction with the Korean peninsula and turned the spotlight on related social issues. The documentary ‘*Mikko*(smuggling)’ (1980) followed illegal Korean immigrants coming to work in Japan. Although the focus was covering the Omura immigration detention center in Nagasaki prefecture, the colonial legacy was discussed to some extent. The chief director *Hagino Yasunobu* himself appears on the screen and narrates in the first person.

Focusing on the historical, political, social background behind the television program ‘*Mikko*’, this paper examines how the Japanese experienced and came to understand the role of *zainichi* Koreans and their own colonial losses. And it also analyzes a shift across time of images of Korean ‘smuggler’ in particular images in non-fiction documentary films, newsreels, and television documentaries in Post-war Japan.

---

Project Researcher, Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo

**Key Words** : Television Documentary, Moving Images, Korea, Memory, Smuggling